

第15回地方都市オーケストラ・

フェスティバル 大阪交響楽団

音楽監督の児玉宏が急病で寺岡清高の指揮に変更になったことに伴い、後半のプフィッツナーの交響曲第2番がシュミットの交響曲第4番に替えられた。変更のなかったヘンゼル

モーツァルト室内管弦楽団

第17回 東京定期演奏会

大阪を中心に活躍するこの楽団の11年ぶりの東京公演には3曲の作品が演奏された。ハイドン／交響曲第44番「哀悼」は独得な音楽の流れの中に作品の形式を見事に表出。哀愁

群馬交響楽団 東京公演

指揮はニコラス・ミルトン。ハンガリー人とフランス人の両親のもと、オーストラリアで生まれ、現在キヤンペラ交響楽団のシェフを務めているという。曲目はポロディンの「イゴリ公」の「ボロヴェッツ人の踊

トのピアノ協奏曲は、旋律が端正で既存の楽式を外れることがない。また管弦楽のパートは長い前奏を与えられ、ソロの登場後も強力に協奏する類でもないことから、ロマン派ではあっても古典的な残り香の漂う作風の曲といえる。これをソリストの

を帯びた旋律をvnに充分歌わせ、他楽器との和声的調和もよく、きらびやかな響きを聴かせる。第4楽章のリズムのはぎれのよさと音楽の高揚感は見事。カール・シュターミッツ／フルート協奏曲ト長調で、ソリストの

大江浩志は実に高度な技術の持主であり、「ラヴェル「シエラザード」、それにベルリオーズ「幻想交響曲」で、オーケストラの色彩感覚が問われるプログラムである。さて最初のポロディンはきわめて強い音で始まった。それはいいがリズムに柔軟性が

がないので音楽が硬直しがちだ。ダ

長尾洋史は硬質な音色と直線的なアプローチを駆使して、やはり古典派よりの視座を明らかにした。後半のシュミットは掘り出し物の一曲だろう。4部からなる単一楽章だが、娘を亡くした悲しみが契機となつてできたという経緯があるだけに、全編

丸く響きのよい素敵な音色を通して作品の洒落た味を表出し、聴衆を魅了した。管弦楽との問答も面白味があり、作品の特質を十分に伝える。後半はモーツァルト／交響曲第40番

K550、ここでも音の色彩感と高揚感が見事で、モーツァルト音楽の

イナミクスの幅は広いのにフレージングがスムーズに進まない。ために終結も熱狂的な盛り上がりに欠けた。二曲目のラヴェルは良かった。まず独唱（中嶋彰子）が声と表現が明確で、抑揚豊かに旋律を歌い出した。ミルトンの指揮も作品の内容を的確

が回想と祈りに満ちている。白眉は第2楽章で、美しい思い出がいつしか慟哭へと至るまでが描かれ、胸に迫る。もっと聴かれていい曲と思うが、この日の演奏はそう思わせるに足るものだった。（3月18日、すみだトリフォニーホール）（木村貴紀）

特色を生き生きと伝え、第4楽章では恍惚の表現を聴かせ、通して格式ある音楽の精神をも伝えた。常任指揮者の門良一は正攻法で古典派の聴かせどころを充分に心得ており、この東京公演を成功させた功績は大きい。（3月18日、津田ホール）（家永 勝）

に示し、「アジア」の官能性は聴きもどった。「幻想」は尻上がりに表現が熟した。「断頭台への行進」から終曲のたゆまぬドラマは見事に決まって、オケも熱演でそれに応えていた。（3月20日、すみだトリフォニーホール）（保延裕史）



日本フィルハーモニー交響楽団 (3月16日)



大阪交響楽団 (●三浦興一)



モーツァルト室内管弦楽団